

15 まつり奉納

(1) 住民のまつり

神道の信仰が形となったものが祭りです。

「^{かんなび}神奈備」にいます神は、一定の日(例大祭)を決めてお出ましになられるので、人々は美酒・珍味・御馳走を捧げ、歌舞音曲や武芸の披露をして、労力と財力の可能な限り最高の待遇をもつてなし、自らも楽しむ。

この催事によって神との友好の変わらないことを確かめる。

それが「まつり」の起源だといわれています。

祭りは、稲作を中心に暮らしを営んできた日本の姿を反映し、春には豊作を、夏には風雨の害が少ないことを祈り、秋には収穫を感謝するもので、地域をあげて行われています。

ふだんの暮らしで神社と関わる機会は、大きく分けると「通過儀礼」と「年中行事」があります。

氏子の人たちは、子どもが生まれれば初詣にでかけ、七五三の祝や還暦など、成長の節目(通過儀礼)に神社に行き無事の成長を祈り感謝してきました。

また、年中行事、特に年に一度の例大祭には、神社での儀式に加えて、神楽の演奏のもと「馬の塔」、「棒の手」、「神輿」が繰り出し屋台も出て、たくさんの人で賑わいました。

「奉納祭り」は、住民の鎮守神への感謝の気持ちでもあり、神様と住民と一緒に楽しみ遊ぶ場でもありました。

そうすることにより、神々から生きる力をいただき、厳しい労働や苦難に耐えることが出来、同時に地域住民の団結・親睦を深める場となりました。

祭りが近づくと身を清め、神に近づく準備をします。

また、神様にお供えした「^{しんぎ}神饌」を祭りの終わりに、お下がりとしていただく「^{なおり}直会」は、神社で行う祭りの中でも大切な行事で、地域住民が同じ場所でいただき、お互いの共同認識を確認しあうものであり、この地域に村落ができて以来、神社が自治組織(共同体)の中心機能を果たしてきた由縁でもあります。

白山神社の例祭礼時には、「オマント」、「タルオマント」、「神楽」、「棒の手」、「盆踊り」などの奉納祭りが氏子の手で行われてきました。

村内の6島は、競い合って趣向を凝らし、一年かけ準備して祭りに臨みましたが、これが島の人達の楽しみでもありました。

親戚の人達を呼んで、赤飯を炊き御馳走を準備して共に祝ってきました。



白山神社例大祭時の幟
写真 令和4年



村の奉納祭りのイメージ

祭りの前日、宵宮よいみやの境内ほど楽しいものではありませんでした。

誰もが遠い子どものころに記憶に残っている懐かしい思い出です。

時代が移り白山神社の例大祭も簡素化され様子が大きく変わりましたが、この「懐かしい思い出」は、残してほしいと切に思います。

戦前の松河戸村の住民にとって、生活そのものであったであろう「奉納祭り」について調べてみることにしました。

特に、この地域の中でも、盛大に行われたといわれる津島神社例大祭(祇園祭)に奉納される馬の塔(オマント奉納は昭和37年まで行われていた)について詳しくみてみます。

【参考】 現在の白山神社の年間祭事（歳時記） 令和3年度現在

	開催月日	行事名	内容	目的
年始の祭り	年の初めを祝い、今年の幸福を願う。		宮中をはじめ全国で行われています。	
	12月31日～1月1日	元旦祭	初詣	正月神をお迎えし、新年を祝う
	1月14日	左義長	どんど焼き	供物を焼き上げ新年の祈願をささげる (門松の煙にのって正月神が再び天に帰られる火祭り)
	3月中旬	祈年祭 (宮中行事 2月17日)	としごいの祭り	町内安全祈願 (年の初め(立春)に、豊年満作を祈念する祭り)
夏祭り	身や心を清めて、高温多湿なこの時期に病気などにかからないよう健康を願う祭り 津島神社の天王祭りから伝わる			
	7月 祇園祭りの1週間前の日曜日	天王始めうんか祭	町内厄除け祭り	悪霊が町内に入るのを防ぐ (稲の害虫駆除の虫送り、オンカ祭を兼ねて行われる。)
	7月 小学校が夏休みに入る第3か第4日曜日	津島神社例大祭 (祇園祭)	(子ども獅子祭)	健康祈願、家族地域の安全 子どもの成長 (夏祭りの中心祭)
	7月 祇園祭りの1週間後の日曜日	提灯山	提灯祭り	天王さまへの奉納 (提灯を飾り天王様に奉納する)
秋祭り	収穫を祝い感謝を申し上げ神をもてなす祭り			
	10月16日 現在は10月の第2月曜日(スポーツの日)	白山神社例大祭	豊年祭(もち投げ)	収穫を祝い、大神様のご加護に感謝し、氏子の健康、安全、幸福、発展を願う祭り
	11月2番目の卯の日 (11月13日～24日の日曜日)	新嘗祭 (宮中行事 11月23日)	いになめの祭り	町内安全祈願 (新穀を神にささげて収穫を感謝する)

遺跡保存会主催

10月3日(文化の日)	道風祭	小野道風の顕彰活動	我が町に生まれた小野道風の業績をたたえ生誕を祝う。
-------------	-----	-----------	---------------------------

※ 本来の開催日が変更されることが多くなりました

(2) 奉納まつりの変化

戦後、地域を取り巻く環境は大きく変化し、人々の考え方の多様化などから祭りへの関心が薄れ、祭りを担ってきた「青年団」の廃止などもあって、祭り奉納が簡素化されてきました。

青年会の解散、伝承者の高齢化により奉納芸が消えていくのを憂慮した人たちは、「子ども会」に目が向けられていきます。

ウンカ虫おくり行事であるところの「雲霞祭」、夏祭り行われる「タルオマント」(後に「子ども獅子」となる。)また、祭りの時の「神楽」などを子どもに託しました。

しかし、平成10年代初頃に「子ども会」も消滅しました。

現在、例祭時には、昭和末頃の「子ども神楽」のメンバーが中心となった松河戸御神楽会が行う「お神楽」と、祇園祭に獅子祭り実行委員会が行う「こども獅子祭り」、そして秋の例大祭に氏子会が行う「餅投げ」を行っています。

最近、神社の中には、自治体の協力のもとマスコミを使って祭りの大々的宣伝をしたり、廃止された祭りの復興なども行われています。

それは、初詣の集客であったり、観光客目的であったり、地域の活性化であったり、住民同士の親睦を深める場であったりして、奉納祭というイベントの目的が徐々に変化しているようにおもわれますが、これが本来の奉納祭りの本質であったように思えます。

松河戸の白山神社の祇園祭でのオマント(馬の塔)は盛大であったといえます。

オマント奉納は、昭和37を最後に廃止になり、その時の場道具は白山神社の倉庫に大切に保管されていますが、廃止から60年が経過し、劣化や破損が目立つようになってきました。

戦後の祭礼時の奉納祭りの様子については、「6夏祭り(p57)」「7秋祭り(p65)」でみていきますが、残念ながら戦前の様子についての詳しい記録や資料が残っていません。

よって推測も含まれますが、戦前の馬の塔(オマント)などを中心に奉納祭りについて調べてみます。



タルオマントの子ども達 (昭和34年頃)
個人蔵



オンカ祭(うんか送り行事)
稲の害虫駆除の虫送り 正副区長と子ども参加
区画整理が始まる前(平成元年頃)



平成元年 ハツ家島宿の皆さん
「タルオマント」に替わる「子ども獅子」
「タルオマント」は祇園祭の7日前に行っていたが、「子ども獅子」は祇園祭に行っている。

(3) 馬の塔の起源

馬の塔は、雨乞いや祭礼などに際して馬を寺社に奉納する行事で、馬の塔、馬の頭と書いて、オマント、オマントウと俗言し、馬を扱った馬頭人から来た言葉のようです。

馬の塔は戦国～江戸時代初期から行われ始め、その起源には諸説ありますが、尾張地方で行われた走り馬行事で、熱田神宮の端午の走り馬に始まるともいわれています。

(尾張藩士高力猿猴庵(1756～1831)はその著書『尾張年中行事絵抄』で、熱田神宮の競馬神事がもともとなつたのではないかという説を紹介している)

馬の塔には、「^{だしうま}本馬」と「^{にわかうま}俄馬」の2種類があります。

「本馬」では、趣向をこらした「馬道具」で飾り付けた馬を、警固の行列を組んで寺社に奉納します。

これに対し「俄馬」は、馬に綱を付けて若者たちが走らせるもので、やはり趣向をこらして馬を飾り付ける場合もあれば、裸馬に薦を巻くだけの場合もありました。

尾張や西三河に特徴的な民俗行事で、もともとは村内だけの「祭礼」に献馬が行われ、馬の背に御幣を立てて神社へ奉納していたようですが、江戸時代中期になると豪華な馬具を付けた飾り馬に標しをのせて、複数の村が連合してより大きな神社やお寺に馬の塔を奉納する「^{がっしゅく}合宿」が始まりました。

江戸時代の記録にはしばしば登場しており、熱田神宮や大須観音、竜泉寺や猿投神社などにそれぞれ周辺地域が合同して(合宿という)奉納する大規模な馬の塔もありました。

合宿は豊作の年だけに行われたため、10年に一度ということもあり特別な祭でした。

この辺りの地域では、旧篠木荘の33か村で連合構成した篠木合宿や、吉根合宿、大森合宿が龍泉寺へ献馬していましたが、その昔は熱田神宮まで馬の塔を出していた記録も残っています。

松河戸村では、この様な合宿に参加したという記録はありませんし、宝暦5年(1755)尾張藩で吟味して作成した「尾陽村々祭礼集」にも上条村や味鏡村など幾つかの村で「馬の塔」を村の祭礼時に出したという記録がありますが、松河戸村の記載はありません。



歌川広重「東海道五拾三次之内 宮 熱田神事」
天保6～7年(1835～36)頃 館蔵



尾張名所図会(1842)

(4) 松河戸の奉納まつり

① 松河戸村の馬の塔の起源

松河戸では、昭和 37 年まで祇園祭時に「馬の塔」(おまん)が行われていました。

馬の塔奉納は市内でも各地で行われていますが、特に松河戸の祇園祭でのオマント奉納は盛大であったといえます。

各島(6 島)ごとに企画され、趣向をこらし飾り付けた馬を白山神社に奉納していましたが、青年会の解散、馬の入手困難などの理由により、昭和 28 年から簡略化され昭和 37 年を最後に廃止になりました。

では松河戸ではいつから「馬の塔」(おまん)が行われていたのでしょうか。

松河戸村の中に 9 社の神社があり、松河戸の「九の宮」とよばれていましたが、大正元年に国による 1 村 1 社合祀令により、松河戸の各島の 9 社(境内社を含めると 15 社)の祠を白山宮に合祀又は境内社とし、白山宮(白山神社)は、松河戸の「村社」となりました。

江戸時代、それぞれの島において、その島の祭礼時などに馬の背に御幣を立てただけの簡素な「馬の塔」を出すことにはあったと思われませんが、豪華な馬具を付けた飾り馬に標具をのせて奉納馬とする行事は、白山神社が村社に列せられた明治 5 年以降と考えられます。

少なくとも、島ごとに競い合う派手なお祭りは、松河戸の各島の 9 社が白山社に集合された大正元年以降と考えられています。

白山神社の倉庫に保管されている馬道具の収納箱をみると、道下島の馬具収納箱には明治 5 年 6 月造之とあることから道下島では天王社の礼祭時(祇園祭)に、豪華な馬具を付けた飾り馬に標具をのせて奉納馬とする行事が既に行われていたこととなります。

明治 5 年といえば門田島の白山社が村社になった年でもあり、門田島の馬具収納箱に明治 8 年 6 月 16 日の箱書きがあります。

また川原島の馬具収納箱明治 19 年 11 月造之、八ツ家島の明治 23 年 6 月造之とあります。

この場道具の収納箱はどれも木でできた立派な箱で、馬道具を購入した当時作られたものであることが想像できます。

豪華な馬具を付けた飾り馬に標具をのせて奉納馬とするオマント行事は、道下島を中心とした河戸地区から始められ、その後各島でも行われはじめ、各島が白山社に集合された大正元年以降には白山神社において、島ごとに競い合う派手なお祭りが行われていたことが推測できます。

行列の順番は、「はな馬」は道下島であり、その後には中小路、門田と河戸地区から始まり、



▲祇園祭で道風公園南の県道を走る馬



▲昭和30年代前半頃の祇園祭の宿回り

八ツ家島、川原島、中島と続きました。



6島揃った集合写真（昭和20年頃）

「おまん」とは15才より25才までの青年団により行われていた。中老（25歳から42歳）は監督指導

② 馬の塔の様式

① 本馬(だし馬)と俄馬(駆馬)

馬の塔には、^{だしうま}本馬と^{にわかうま}俄馬の2種類がありますが、松河戸のオマントでは、前日の試薬祭(旧暦の6月15日)は「本馬」で、各島趣向をこらした「馬道具」で飾り付けた馬で、八幡社に集合し白山神社まで行列を行いました。

ほんやく(旧暦の6月16日)では余興として「駆馬」が行われ、午後から道風公園前の直線コース(本道)で馬を放し、「おっぱ」といって全力で走らせました。



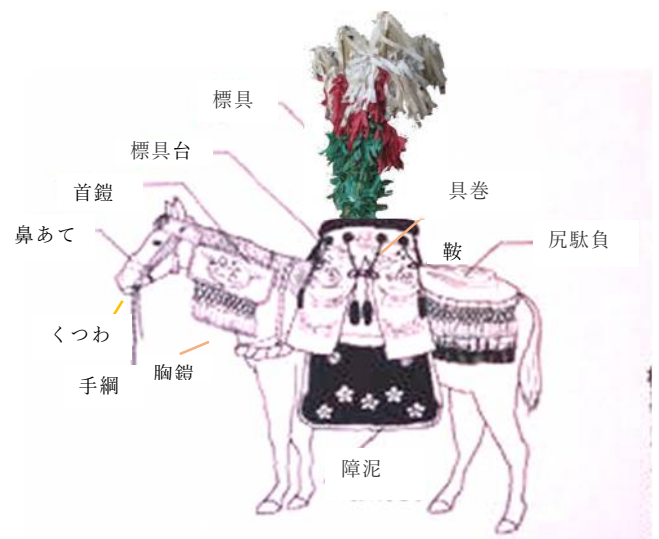
八ツ家島(戦前)

② 馬道具

馬の背に^{びょうぎ}標具と呼ばれる^{ごりん}御幣(馬林)を立てて、豪華な馬道具で飾り氏神様へ奉納しました。

馬は赤い地の厚い織物に金の刺繍を施した豪華極まる馬具で飾られ、馬の背の標具は、「馬林」で飾られていました。

馬道具は、馬の背に「鞍」を乗せ、その上に「標具台」そこへ「標具」、それに巻き付ける「標具巻」、馬の尻に乗せる「尻駄負」、馬の両側面に吊す「障泥」などで構成されています。



- 標具(だし)……………神に供える御幣(馬林)
- 標具台(だしだい)……標具を載せる台
- 鞍(くら)……………馬の背に乗せる荷物等を安定させるもの
- 標具巻(だしまき) …… 標具に巻き付ける飾り
- 尻駄負(しりだおい)…尻に掛ける
- 障泥(あおり)……………泥よけ
- 胸鑑(むねよろい)……馬の胸を防御
- 首鑑(くびよろい)……馬の首を防御
- 鼻あて ………………馬の顔面防御
- くつわ ………………手綱をつけてウマを御する馬具

③ 馬林

馬林は標具の飾り物で、割竹数十本におのおの色紙を巻き、御幣(紙花や紙ふさ等)を取りつけて飾り付けた馬を神社へ奉納して祭りが終わると、馬林は各農家に配られました。

これを田畑に突き刺しておく、農作物に害虫がつかないと言われていました。

試薬祭の前夜(旧暦の6月14日)、それぞれの宿に、島の人が総出で集まって、馬林が作られました。

午の背にきれいな「ばれん」が掛けられ、「ばりん」という5尺ほどの竹を割ってこれに紅白の和紙を巻き、上から白・赤・青の紙の房を付けたものを50~60本作り、鞍の上のまきわら(鞍の居木上に建てた藁の芯)に何段にも刺し馬を飾りました。

標具である馬林は、「馬標」であるため、島によって色や形が異なっていました。材料、構造、寸法が決まっており勝手な変更は許されませんでした。



道下島の標具(ばりん)

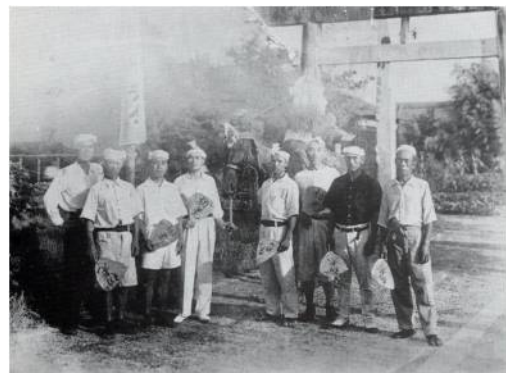
③ その他の奉納祭り

戦前までは、祇園祭以外の秋の例大祭にも「馬の塔奉納」などが行われていました。

右写真は、白山神社の秋の例大祭時に行われた還暦連中の厄払い献馬時の記念写真です。

特別な祈願のある個人や団体から、心願馬と称し、立願の内容を書いたのぼりや御幣を立てた簡単な飾りの馬が出されることもありました。

また、その下の写真は中島の集会所の新築祝奉納した時の写真で、島の祝奉納は例大祭に合わせて行われていました。



大正中頃、白山神社の祭礼時の初老連中の厄払い献馬

祇園祭の1週間後に、天王様に365個の提灯山を作り、おどりを奉納しました。

青年団を中心に準備が進められ、夕方から夜遅くまで盆踊りを楽しみました。



昭和28年 盆踊り



昭和7年
中島実行組合集会所を新築した時、例祭に合わせて行われた。

「棒の手」についても、明治以前は松河戸でも行われていたようで、嘉永5年(1852)に新居村(現、尾張旭市)で催された無二流の先達者供養のための「棒大会」へ春日井市内の村が多数参加した中で、松河戸村からも棒の手の参加があったと記載されていることから、祭り時には、棒の手も奉納されていたと思われます。



尾張旭の無二流棒の手 現在

※ 無二流の棒の手…尾張旭市旧新居村を中心に伝承されてきたもので、現在県無形民俗文化財となっているが、松河戸では明治の頃に行われなくなったといわれている。

「棒の手」・「神楽」などの奉納芸、今という民俗芸能は祭りの花であり、その土地に住む人々の最大の楽しみでした。

たるおまん和全景



小学生男子の祭り

祇園祭の1週間前(旧暦の6月8日)に「タルオマント」(小学生男子の祭り)が行われていましたが、これは、「馬の塔奉納」の子ども版で、戦後始められたものです。

午後になると村の人達は農作業を休み、島の祭りの宿に集まって飲食し、子どもたちは「やれこれやれこれ、八反田のせきが切れたぞよ、樽のせんも抜けたぞよ。」と唄いながら島を歩いて回った。



秋祭りでの「子ども神楽」の演奏
平成5年 秋祭り

やがて大人たちの手で、麦わらで作ったタルに笹竹飾りのタルオマントができると、子どもたちは手ぬぐいで鉢巻きをし、腰に力紙を付けて「ヨイサーヨイサー」と麦わらで作ったタルに笹竹飾りのみこしを担いで、島ごとに設けられた宿参りをしました。

宿を何度も回った後に、白山神社へ行き、社殿の周りを3周して本殿の西にある各島の境内社にタルオマントを奉納しました。

タルオマントは、昭和38年まで続きましたが、昭和39年から子ども獅子祭り(獅子かぶり)に代わり、子どもが夏休みに入る新暦の7月の第3か4日曜日(祇園祭り)に行われています。



昭和60年10月10日秋祭り 子供会による飾り馬と神楽 台車の上へ馬の形をした山車を引いている。
祇園祭のオマント奉納を再現している。(各島の宿から道風公園に集合し、八幡社から白山神社へ行列を行った。)

(5) 馬道具

① 馬道具の現状

「馬の塔」で使用される馬道具については、昭和 37 年を最後に「おまん」とが廃止された後は各島で保管されてきました。

しかし、区画整理が終了して島が無くなると、平成 30 年に神社に保管を任されました。

島の場道具は、島から町内会へ引き継ぐ予定でしたが、区画整理後に建てられた住宅では、大きな場道具の保管が困難となったことから、各島から馬道具を白山神社が預かり、倉庫において大切に保管することとなりました。

毎年の夏祭りの最後になる提灯山祭事に、白山神社総代、年行司の人達が日陰ぼしを行って提灯山の来所者(提灯山の始まる前)にみてもらっています。

この馬道具は各島で異なっており、趣向をこらし飾り付けを島で競い合っていたことだけあって、どの島の場道具も美術品、骨董品としての価値があり、島の宝物として扱われてきました。

そして、いつでも復活できるように大切に保管されているものの、オマント廃止から 60 年が経過し、劣化や破損が目立つようになってきました。

今後、この馬道具をどのように取り扱うかが懸案事項となっています。

馬飾りには、鼻当、首鎧、尻駄負、障泥等がある。

いずれも赤地羅紗布に金銀糸で施した立派な芸術品で、図柄は竜、虎の勇壮な姿を描いたもの、「源平盛衰記」、「義経の八艘とび」等の武勇伝物語の意匠がみられる。



▲だし台の飾り 衣馬のはなあて 轡(くつわ)



▲明治42年 だし台(左) 馬のくら(右) (川原島)



▲だし巻「義経の八艘とび」



▲馬の尻飾り「義経の八艘とび」



▲馬の調衣「騎馬武者」源平合戦図



写真と図表で見る松河戸 松河戸誌研究会 平成 28 年

② 馬道具(倉庫保管)

昭和 37 年に終わった馬の塔(オマント)で使用した馬の飾り着です。

各島(6 島)の物が保管されており、最も古いものは、明治 5 年(1875)6 月(道下島箱書き)で、次いで明治 8 年(1875)6 月 16 日(門田島箱書き)となって、河戸地区ものが古くなっています。

川原島明治 19 年、八ツ家島明治 23 年、中島大正 4 年と、村中地区では新しくなっています。作り直された可能性はありますが、本馬の島行列の順番と相応しています。

使用されていた各島の馬道具については、貴重なものなので白山神社の社務所に保管されており、毎年の夏祭りの最後になる提灯山祭事に、白山神社総代、年行司の人達が日陰ぼしを行って提灯山の来所者(提灯山の始まる前)にみてもらっている。いつでも復活できるよう大切に保管されている

平成 10 年 8 月 9 日(日) ちょうちん山(虫干し)の機会に調査

◎馬道具(馬装)

- 各島とも全装具が残っている 新旧 2 組あるところもある(1 組は雨天用との説も)
- 拝殿周囲の虫干し状況写真

東側 北から 河戸・門田(新旧 2 組) 河戸の鼻当て:丸に吉

西側 南から 八ツ家・川原・中(何れも新旧 2 組)川原の鼻当て:「川」

*記載事項 「ダシ台周り飾り布(ダシ巻)の裏書き 大正 15 年 旧 6 月新調 川原島」

◎収納箱 各島 2 組(大 底の深いながもち型 小 浅く底の広い型)

- 門田 「乙 明治 8 歳 亥 6 月 16 日 門田嶋之内(1875 乙亥)」
- 道下 「明治 5 年申 6 月 造之(1872 壬申)若者、中老、大老氏名 13」
- 中小路 「表 馬具類 裏 氏名(写真)」
- 八ツ家 「什具※ 明治 23 年 6 月 15 日 造之(1890)」
- 川原 「明治 19 年 戌 11 月 吉日 造之(1886 丙戌)」

宿張りちょうちん:明治 23 年 寅 7 月 吉日(1890 庚寅)

- 中島 「大正 4 年 6 月 造之(1915)」

※什具(じゅうぐ):日常使う家具・道具 什器、什物に同じ

松河戸白山神社の記録 岡島博氏 平成 10 年 3 月

ここに記載の写真については、所在不明

- ・次回、神社シリーズ No.16 では「神々と神社の成り立ち」をお送りします。
- ・神社シリーズ No.1 「春日井市内にある白山神社」、～No.15「まつり奉納」については、下記ホームページに掲載してあります。

ドメイン名「com」については現在不通になっています。「org」で閲覧ください。

松河戸文化科学探求隊
隊長 長谷川 浩
080-3657-7052
松河戸町の沿革ホームページ
<http://matsukawado.org/>